

〈名画の扉〉

大川美術館常設展から

夕暮れ時のような褐色の乾いた空気の中、ニコライ堂の横の道を歩く人影が一人。画面中央にニコライ堂の白壁が映え、質量のある存在感を示しています。その真下に黒く簡略化された人物がいることで、画面の奥行き、物語の広がりを感じさせます。点景を用いた演出も含め、考え抜かれた構図であることがわかります。

ここに描かれているニコライ堂は、本堂ではなく今は取り壊されてしまった小聖堂です。

このころの松本竣介は、スケッチ帳を携えて東京各所を歩きまわり、そこで見つけたモチーフをもとに、油彩作品を描いていました。特にニコライ堂は竣介にとって格好のモチーフであり、いろいろな角度や構図で描きました。

この絵は、当館初代館長・大川栄二氏が初めて出会った松本竣介作品でもあります。他の絵と違っていつでも新鮮であることに驚き、松本竣介を中心とした自身のコレクション形成を始め、今の大川美術館につながっていきます。

(池田)

「ニコライ堂の横の道」

1941年ころ、油彩・板
38・0センチ×45・5センチ

松本竣介 (1912〜48年)

